

資料報告 藤野地域で採集された縄文時代の考古資料 — 寄贈された表面採集資料の調査 —

中川 真人・相模原縄文研究会*

*B班: 荒井 基喬・市川 憲子・金田 弘子・鹿山 茂樹・鈴木 文昭・三嶋最都子・和家 洋壽

はじめに

神奈川県北部の東西に跨る相模原市域は、328.91km²の広さで県下2番目の面積を誇る。大局的には市域東半に広大な相模野台地、市域西半に関東・丹沢山地を擁する津久井地域の山間部からなる。この内、県の遺跡分布地図には531箇所の埋蔵文化財補包蔵地(遺跡)が認められ、市域に対しておよそ7%、22.8km²の範囲を占める。その多くが河川流域沿いに分布し、複合遺跡含めて縄文時代の遺跡が415箇所と、遺跡数全体の約8割で縄文時代の活動の痕跡を認めることができる。

相模原市立博物館では、平成18・19年の旧津久井郡(城山町・津久井町・相模湖町・藤野町)との市町合併を契機に津久井地域の調査研究を開始し、考古分野においては発掘調査資料の所在確認と再整理作業、個人等による表面採集資料の調査を進めてきている。また、平成20年度からは中央大学との共同調査による大日野原遺跡の発掘調査、平成22年度からは市教育委員会文化財保護課と神奈川県公園協会、そして市民ボランティアである津久井市民調査グループとの市民協働による津久井城跡の測量・発掘調査を継続的に実施している。

表面採集資料の調査は、藤野地域の資料を中心に進められてきた。当館研究報告第17集で長谷川孟氏により1974年頃に分布調査された牧野地区採集資料の資料報告をはじめ(河本2008)、第18集からは佐藤道博氏による1970年頃に分布調査された沢井地区の大日野原遺跡や牧野地区の中尾遺跡(ND2・4・5地点、註1)の採集資料の資料報告を、博物館の考古ボランティアグループである相模原縄文研究会との市民協働により実施してきた(河本ほか2009、正ほか2015)。今回の資料報告は、相模原縄文研究会と継続的に整理作業を進めてきた佐藤氏採集資料のうち、藤野地域の^{おほはた}大畑遺跡、^{おおだち}大刀遺跡、中尾遺跡(ND3地点)、^{どうち}堂地遺跡(ND6~8地点)、^{おおくわ}大久和遺跡の5遺跡について、資料報告するものである(註2)。

1. 藤野地域の考古学研究史

藤野地域(旧藤野町)は関東山地を東流する相模川によって南北に二分され、北から境川と沢井川が、南から

秋山川、篠原川が相模川へと注いでいる(第1図)。沢井川は南流する佐野川が落合で栢谷川と合流した二次河川で、沢井川の右岸には約20haにも及ぶ広大な大日野原の台地が広がる。この台地に立地する大日野原遺跡が藤野地域の発掘調査の嚆矢である。詳細は不明であるが、昭和28年(1953)に立川市立高等学校社会部が発掘調査を行い、縄文時代中期後葉の竪穴住居址を発見しているようである(藤野町教育委員会1978)。

藤野地域で遺跡の調査やその保護のエポックを誘引したのは、昭和40年(1965)の中央高速道路建設に伴う下小淵遺跡及び^{くぐと}栢戸中原遺跡の緊急発掘調査とその後の大規模な建設工事であったと思われる。下小淵遺跡は境川が相模川へと合流する左岸の山裾段丘面に立地し、浅い谷を挟んで西側の「牟礼」と東側の「卵塔」の地点に分けられる(奥田1965)。牟礼地点は平安時代の集落址で、10世紀代とみられる竪穴住居址が3軒発見される。卵塔地点でも10世紀代の竪穴住居址が1軒発見されたほか、縄文時代前期の竪穴住居址1軒と後期の敷石住居址1軒が調査されている。詳細が不明であるため前期住居址の評価は難しいが、石製珧状耳飾も伴っていたようで特筆される。栢戸中原遺跡では縄文時代後期の弧状を呈する配石遺構群と古代の竪穴住居址が2軒以上検出される(赤星・岡本1965)。配石遺構群には石棺墓も含まれており、加曽利B式土器が伴っていたとされる。いわゆる“赤星ノート”には出土土器のスケッチが残されており、加曽利B2式が主体であったことが確認できる。市域には加曽利B2式期の配石遺構は国指定史跡川尻石器時代遺跡など極めて限られており、重要な調査成果であると再評価できるとともに、正式な報告が望まれる。また、古代の遺物包含層からは青銅製如来座像が出土しており、市内でも他に出土事例がなく注目される。

中央高速道路建設に伴う発掘調査は、遺跡の分布が不明であったこともあり、小規模かつ短期間であったことに加え、調査もされない未発見の遺跡も多かったことは想像に難くない。調査の成果が上がる一方で、遺跡を保護するための課題も顕在化したのが1960年代の動向であり、これは藤野地域に限ったことではなく、全国的にも



第1図 遺跡分布図(S=1/50,000)

過渡期であったといえる。こうした状況の中、藤野地域では1970年代に入ってから、県文化財保護審議会委員であった赤星直忠氏が日連地区の大刀遺跡、開戸原遺跡、中村原遺跡などの資料調査に赴き（藤野町教育委員会1978）、旧相模湖町職員であった佐藤道博氏や旧藤野町の小学校教員であった長谷川孟氏らが地道な分布調査を精力的に実施していった。佐藤氏の功績は大貫英明氏によって『相模湖町史』にも紹介され、佐藤氏の分布調査によって発見された旧藤野町の遺跡は佐野川遺跡、大畑遺跡、大日野原遺跡、天奈遺跡、大刀遺跡、馬本遺跡、堂地遺跡、大鐘遺跡、大久和遺跡、青蓮寺遺跡、篠原遺跡があげられる（大貫2001）。長谷川氏の分布調査は1974年頃に行われ、菅井Ⅰ遺跡、菅井Ⅱ遺跡、菅井尾崎原遺跡、伏馬田茅ノ木遺跡、伏馬田道下遺跡、長又下平遺跡、長又上開戸遺跡、大久和戸丸遺跡などが発見され、当館研究報告第17集に資料報告されている（河本2008）。

長谷川氏の分布調査の成果は1977年に藤野町文化財保護委員会が実施した遺跡の分布調査並びに資料調査へと結実し、翌1978年3月に『ふじ之町の埋蔵文化財』としてまとめられる。同報告書には遺跡分布図も付され、町内46か所の遺跡が把握された。なお、現在の県遺跡分布地図はこの分布図をベースとしたものである。

また、赤星氏の調査成果は、1979年に刊行された『神奈川県史』に柵戸遺跡、大刀遺跡、大日野原遺跡、下岩遺跡の4遺跡が紹介される（赤星・岡本1979）。県史で「胴下半を欠く写実的な土偶」として紹介された大日野原遺跡の土偶は、同年、深鉢形土器の口縁部に接合したため、人体文土器と合わせて希有な土偶装飾付き土器として中村日出男氏によって『考古学ジャーナル』誌上に資料紹介される（中村1979）。

1970年代までが分布調査や資料調査による遺跡の基礎資料の集成による第1の画期とすれば、1980年代後半が発掘調査に基づく町の歴史を紡ぐ第2の画期となる。相模湖インターチェンジの拡張工事に伴って発掘調査された嵯峨遺跡では、縄文時代中期と平安時代（10世紀代）の集落址が確認された（滝澤ほか1987）。また、町史編さん事業に伴う大日野原遺跡（滝澤ほか1998）と篠原大割目遺跡（滝澤ほか1997）の学術調査でも平安時代や縄文時代の集落の一部が調査された。加えて分布調査も実施され、奥牧野遺跡など新たに発見された遺跡もある（土井1994）。これらの発掘調査が、第1の画期である分布調査の成果をベースにある点は強調しておきたい。

町史編さん事業による発掘調査から20年間は、藤野地域で主だった調査はないが、1990年代は道志川流域沿いで公共事業に伴う発掘調査が頻発し、縄文時代草創期か

ら晩期に至るまでの成果が得られている。一方、平成19年の合併以後の動向としては、冒頭ふれた中央大学と博物館による大日野原遺跡の共同調査（第3・4次調査）が主であり、平成20年度以降の継続的な調査によって集落の形成時期などが明らかになってきている（小林ほか2013・2014）。

2. 採集資料の整理作業経過

今回、資料報告の対象としたのは佐藤道博氏が藤野地域の分布調査で採集した資料で、氏が転居される前に当時の藤野町に寄贈されたものである。合併後の平成19年度に、吉野宿ふじやに保管されていた資料を博物館収蔵庫に移し、先行して大日野原遺跡の資料報告がされている（河本ほか2009）。その後、作業の効率化を図るため、相模原縄文研究会を2班に分け、A班が中尾遺跡、B班が堂地遺跡などの資料整理を進めることとし、平成23年4月13日から整理作業に着手した。

資料は採集地点ごとに分類された状態であり、一部には注記がされていた資料も含まれていた。整理作業は資料の確認後に、遺物の洗浄、注記を行って採集地点ごとに任意の通し番号を付し（註3）、遺物台帳を作成した。土器を分類して観察表を作成するとともに、図化すべき資料を抽出して拓本と断面実測を行い、採集地点ごとにレイアウト図を作成した（註4）。石器についても同様に台帳を整備し、重量の計測と器種分類、石材鑑定を行い、観察表を作成したが図化までは至らなかった。採集地点別の土器・石器数の内訳は表1のとおりである。

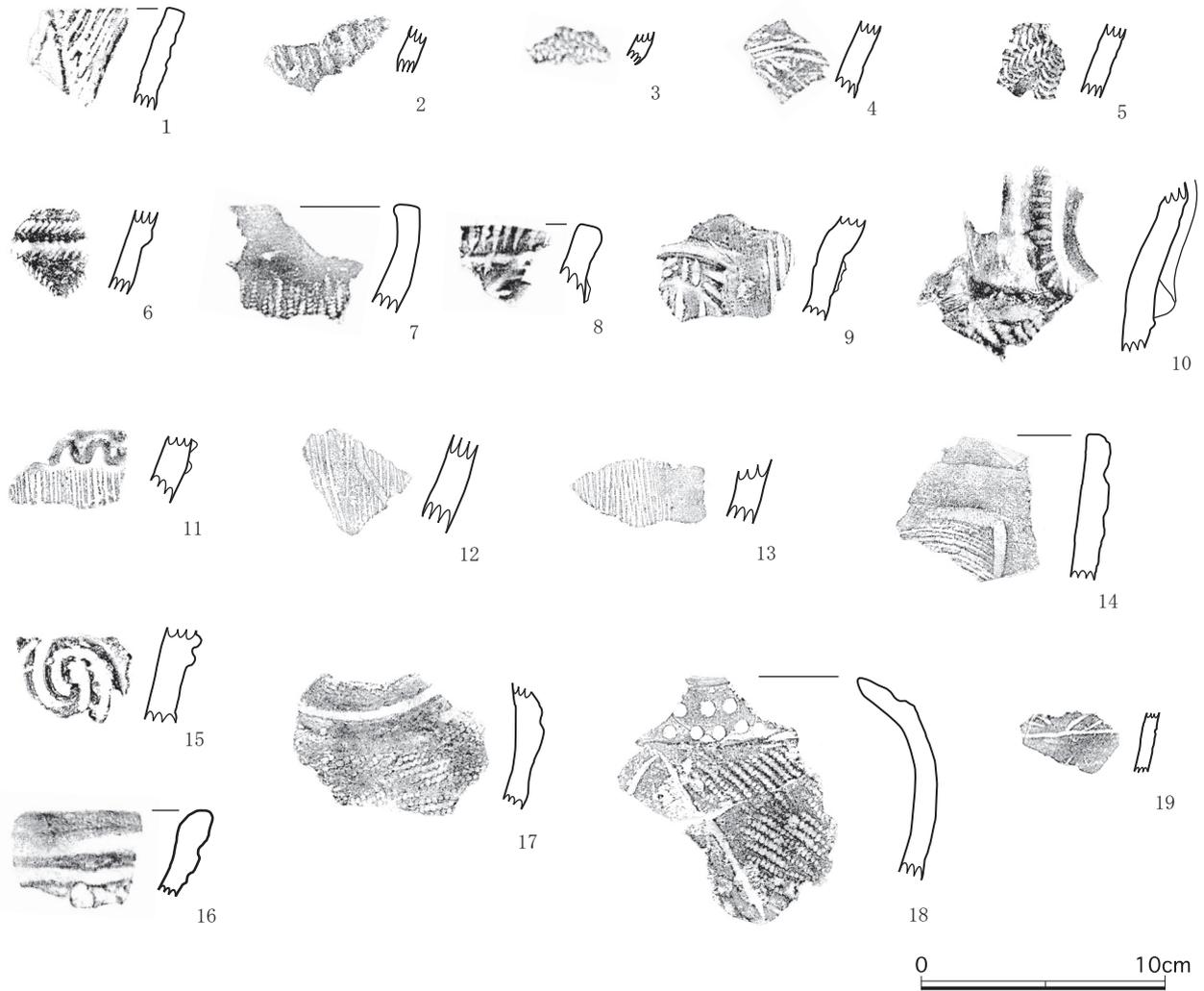
佐藤氏旧蔵資料には土器・石器のほか、採集地点とみられる場所にドットが落とされた1/50,000地形図や、採集地点の略図を記したメモ書きなど、採集場所を示す資料も断片的に残されている。地形図は昭和44年3月30日国土地理院発行の「上野原」地形図で、大日野原遺跡の分布調査は昭和45年暮れとされていることから（河本前掲）、本報告で取り上げる資料もその前後によるものと思われる。沢井地区の大畑と名倉地区の大刀は第2図に、牧野地区の中尾、堂地、大久和については第3図に佐藤氏の遺跡分布図を示した。遺物の整理作業と並行して、佐藤氏の遺跡分布図と略図を記したメモ書き、既知の調査報告等や、県の遺跡分布地図・遺跡台帳との関係精査、遺跡の現地踏査も行い、採集地点の特定を進めた。

なお、大畑遺跡と大久和遺跡には各地域にドットのみが落とされており、採集遺跡の場所として判断した。大刀遺跡については大刀地域にドットは付されていなかったため、最終地点の特定はできなかった。中尾・堂地の分布図には「1」～「8」地点を付したドットと「中尾」「N」

る縦位区画内に弧状の条線を充填する。11は曾利Ⅱ式、12・13は曾利Ⅲ～Ⅳ式、14は曾利Ⅳ式に比定される。15は隆線による渦巻文、16の口縁部片は平行沈線と沈線区画内に縄文が施される。いずれも加曾利E3式頃の所産と思われる。17・18は中期末の加曾利E4式に比定される土器で、17は地文の縄文にナデ消しがみられ、断面に植物種子と思われる圧痕がある。18の口縁部片は、深く内湾した口縁部に2段の刺突文列、胴部は磨消縄文による

鋸歯文を描出。19は横位沈線の区画内に斜行沈線がみられ、後期前葉堀之内1式と思われる。

石器は石鏃4点、石鏃未成品3点、楔形石器6点、打製石斧14点、横刃形石器2点、石匙2点、二次加工のある剥片(RF)5点、微細剥離痕のある剥片(UF)21点、石核4点、剥片51点の合計112点が採集される。打製石斧の石材は佐野川の礫種組成を顕著に反映して、砂岩が多用されている。



第4図 大畑遺跡採集の縄文土器(S=1/3)

(2) 大刀遺跡 (第5図)

名倉字大刀に所在するが、採集地点は不明であるため、便宜的に大刀遺跡とした。大刀地域は東流する相模川に南から秋山川が合流する段丘面に位置する。町分布調査では開戸原遺跡と中原遺跡が認められ、昭和45年に赤星氏が資料調査に訪れている。特に中原遺跡は遺物の分布が濃密で、昭和54年刊行の『神奈川県史』では大刀遺跡の遺跡名で中期中葉～後葉の遺物散布地として紹介される。いずれも同じ代表地番の同一遺跡であるため、第1図には「大刀中原遺跡」とした。さらには、町史編さん事業に伴う分布調査で、大刀押尾遺跡が確認されており、3遺跡とも県の遺跡分布地図・遺跡台帳に登録されている。佐藤氏の分布調査はこれらに先立つもので、採集資料は縄文土器132点、石器1点の合計133点である。

縄文土器は前期後半の竹管文系土器を主体としている。第5図1～11は諸磯a式の一群で、半截竹管状工具を用いた平行沈線文や爪形文を多用する。1は円形刺突文と平行沈線による所謂米字文(対角線文)の一部とみられ、諸磯a式古段階に比定される。2の口縁部には突起をもち、口縁に沿って平行沈線が巡る。3の口縁部は隆線に沿って幅狭の爪形文が施され、4は肥厚した口縁に沿って幅狭の深い爪形文が巡る。5は薄手の口縁部で、無節の縄文を地文とし、口縁に沿って平行沈線と結節沈線が巡る。6～8は所謂木葉文の一部で、爪形文で区画されたモチーフ内に磨消縄文が施される。9は縦位の円形刺突文列を軸に細い平行沈線を密に施したもので、所謂肋骨文が直線化したものとみられる。10は縄文を地文に2列の円形刺突文を施す。2～10は諸磯a式新段階に比定される。11は平行沈線文の胴部片で、諸磯a式新段階～b式古段階と思われる。

12～23は諸磯b式の一群で、幅広の爪形文や平行沈線文、集合沈線文、浮線文を多用する。12は胎土に雲母を多量に含み、縄文地に幅広の平行沈線を施す。13～19は幅広の爪形文で、14の口縁部片は浮線文に沿って爪形文を施す。20～22は幅広の平行沈線で、20は平行沈線間に蛇行沈線を施す。21・22は平行沈線で三角形モチーフを描出する。23の口縁部片は無節Lの縄文地に、口縁に沿って半截竹管状工具を刺突した爪形文列を施す。24～26、29・30は浮線文の土器で、25・26は無節の縄文を地文とし、25の口唇部は刻みをもち、胎土に雲母を少量含む。27は縄文地に平行沈線で円文を描出。28は結節状の集合沈線を施す。31はS字状に屈曲した器形で、屈曲部に刻みを加え、単節RLを地文とする。32は縄文地に斜行する集合沈線の下に横位の平行沈線が施される。33は調整の条痕を留める。12～22は諸磯b式古段階、

24～30は諸磯b式新段階の所産とみられる。

34は細密の集合沈線で、諸磯c式に比定される。

石器はホルンフェルス製の剥片が1点採集されているのみである。

(3) 中尾遺跡 ND3 地点 (第6・7図、表3)

中尾遺跡は牧野字中尾に所在する。秋山川へと注ぐ馬本沢を上流へと遡ると、舌状台地の先端に鎮座する八幡神社で2本の沢が合流する。八幡神社の東は八幡沢と呼ばれ、その東岸にND1～3地点、西岸の舌状台地にND4・5地点が分布する。町分布調査でも確認され、相模原市No.505遺跡として周知化されている中尾小尾谷戸遺跡は八幡沢東岸の遺跡であり、本報告資料も中尾小尾谷戸遺跡に含まれるものである(註7)。採集資料は縄文土器499点、石器324点の合計823点である。

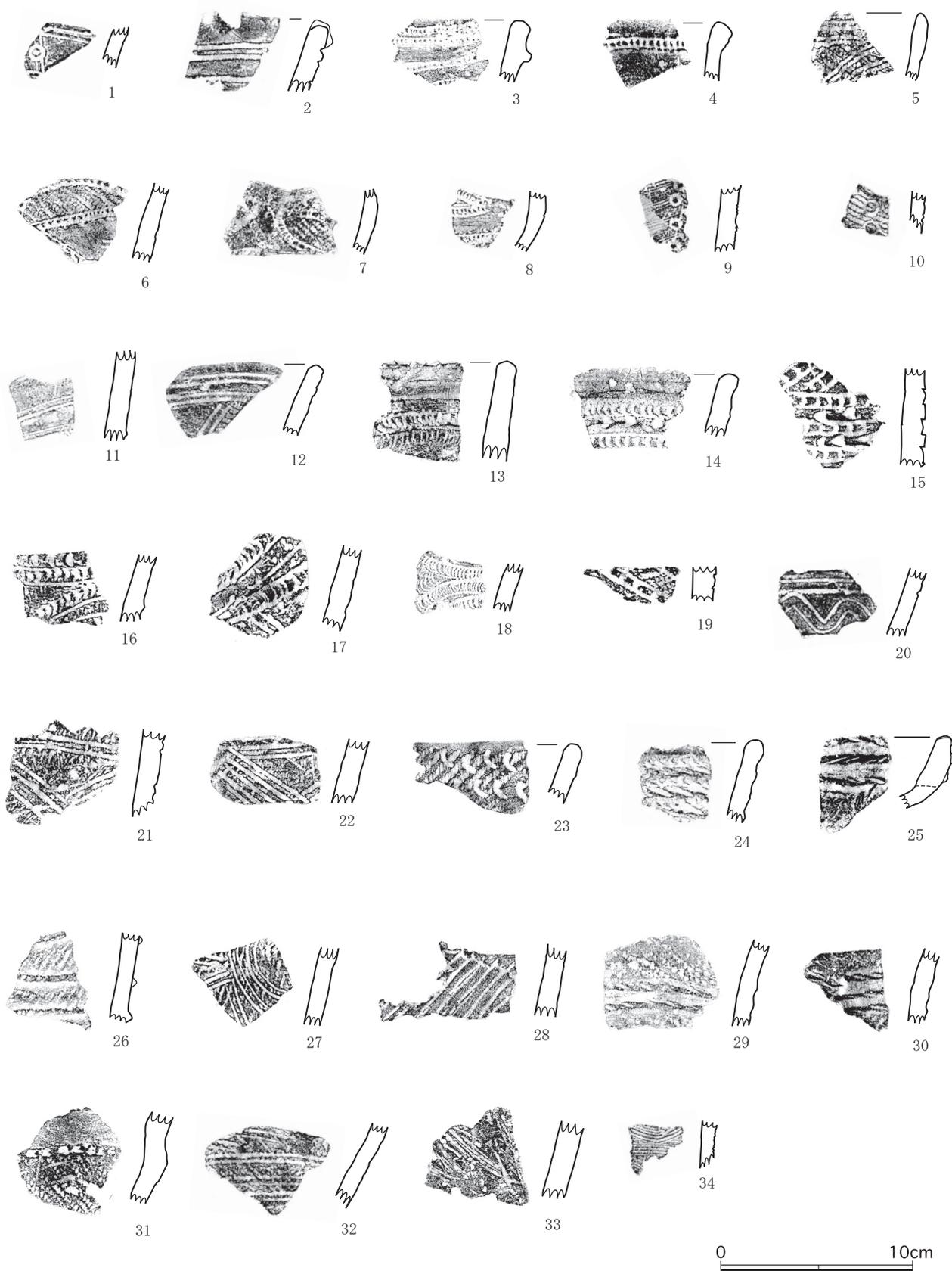
縄文土器は中期後葉を主体に早期～後期のものが含まれる。第6図1の口縁部片は口唇部がひだ状に外に出っ張り、口縁直下に指頭で押捺した隆帯文が巡る。早期後葉の東海条痕文系土器の上ノ山式に比定される。

2～6は前期前半の羽状縄文系土器で、2～4には胎土に繊維を含む。6は結節縄文で内面に植物種子と思われる圧痕を留める。

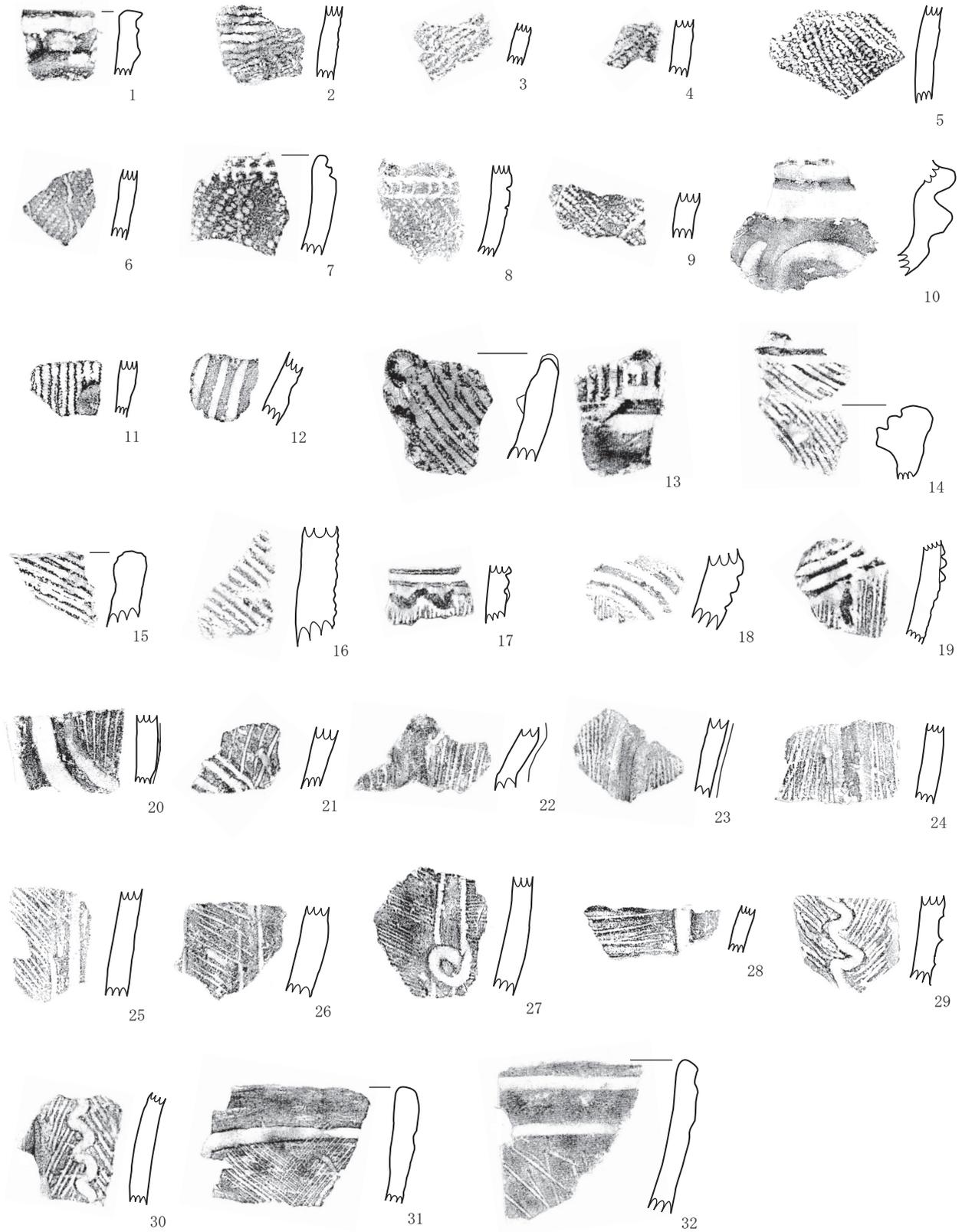
7～9は前期後半の竹管文系土器で、いずれも縄文を地文とする。7は口縁部に2列の爪形文を配し、8は幅広の爪形文を横位に巡らせる。7は諸磯a式、8は諸磯b式古段階に比定される。9は単節LRを縦位に回転させて施文している。

10～12は中期中葉の土器である。10は凹線による円文、11は節を縦走させた縄文地に磨消による円文を施しており、いずれも勝坂3式に比定される。

13～42は中期後葉～中期末の曾利式土器で、本遺跡採集資料の主体をなす。13～16は口縁部の重弧文と斜行文によるもので、13・14が曾利Ⅱ式、15・16が曾利Ⅱ～Ⅲ式に比定される。17は胴部の条線地文に頸部で蛇行隆線を巡らせた曾利Ⅱ式である。18～21の胴部片は大柄渦巻文の一部で、18・19は半截竹管状工具で低い幅広隆帯をなでて3本隆線とした施文で、今福氏(2008)の隆帯施文技法の3類に該当し、曾利Ⅲ式に比定される。20の渦巻文は指ナデによる2本隆線の5類、21は棒状工具による3本隆線の4類で、曾利Ⅲ～Ⅳ式に比定される。22～27の胴部片は縦位の条線地に隆帯の懸垂文をもつものや、縦位区画内に斜行条線を充填したもので、曾利Ⅲ～Ⅳ式に比定される。28は隆帯と沈線による縦位区画内に横位の条線を充填したもので、胎土に雲母を含む。中期後葉の所産と思われる。29・30は縦位区画内に矢羽

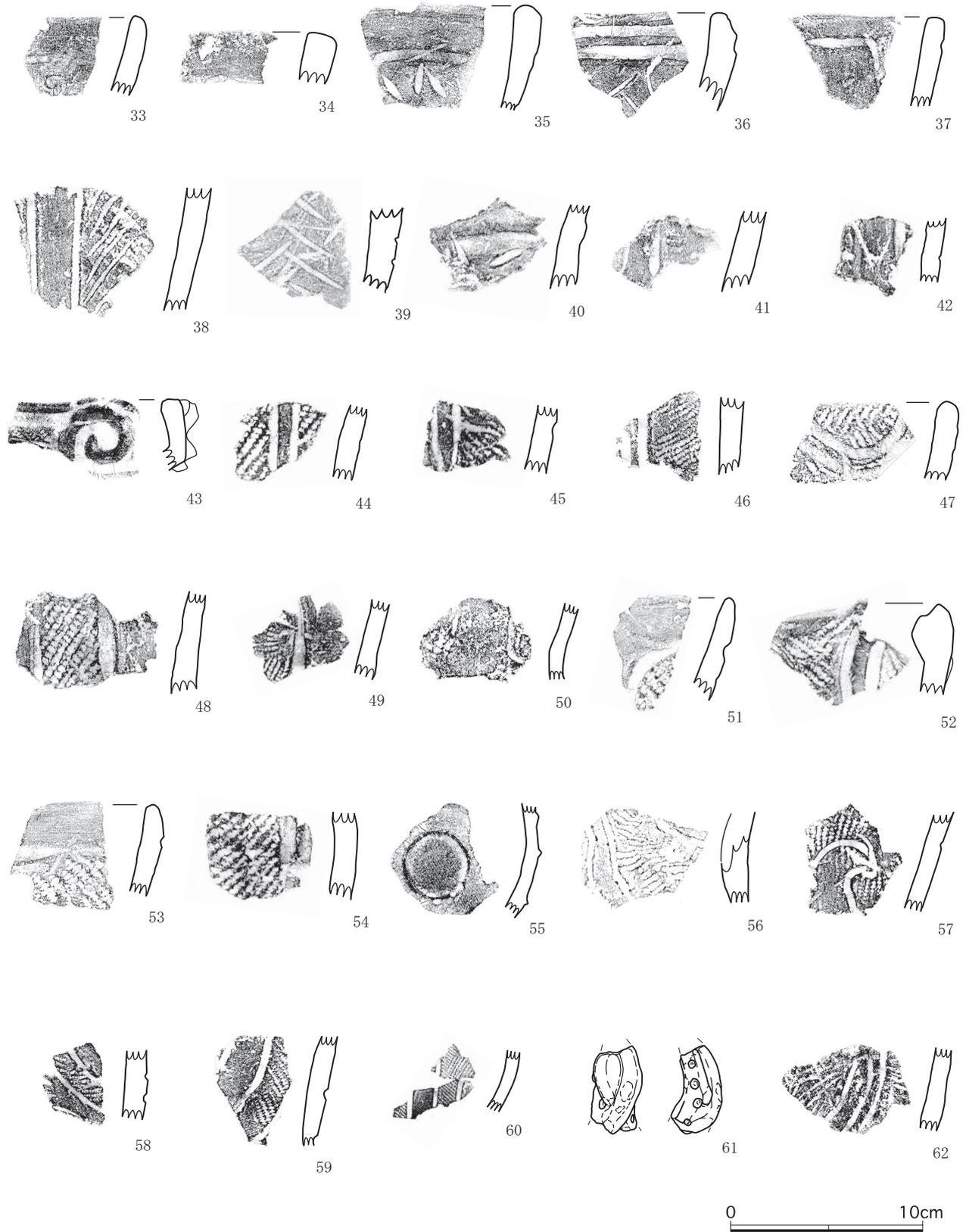


第5図 大刀遺跡採集の縄文土器(S=1/3)



0 10cm

第6図 中尾遺跡 ND3 地点採集の縄文土器(1) (S=1/3)



第7図 中尾遺跡 ND3 地点採集の縄文土器(2) (S=1/3)

状の条線を充填し、中心軸に蛇行沈線を垂下させる。所謂尾崎型文様の土器で(戸田1998)、曾利Ⅳ式に相当する。31・32は口縁部文様帯が喪失し、沈線区画内に矢羽状や斜行する条線を充填した曾利Ⅳ式である。33～37は口縁部片で、33は口縁直下に沈線による蕨手状懸垂文をもつ曾利Ⅳ式である。内面に植物種子と思われる圧痕を留める。35・36はハの字状列点文、37は沈線による縦位区画のみで、いずれも曾利Ⅴ式に比定される。

43～55は中期後葉～中期末の加曾利Ⅴ式土器で、43の口縁部は隆線による渦巻文を伴う区画文で、加曾利Ⅴ式に比定される。44～46は平行沈線による懸垂文間に単節LRを施しており、45の断面には植物種子と思われる圧痕を留める。いずれも加曾利Ⅴ式古段階の所産である。47の口縁部は縄文地に2本単位の沈線が連弧文状に巡る。48～50は磨消縄文による幅広の縦位区画の懸垂文で、加曾利Ⅴ式新段階に含まれる。51は口縁部文様帯の楕円区画文か逆U字状モチーフの磨消縄文によるもので、加曾利Ⅴ式～Ⅳ式である。52は波状口縁で逆U字状モチーフを留め、53は凹線下位に縄文を施す。54は微隆起線による区画を留める。52～54は加曾利Ⅴ式土器に比定される。55は中期後葉の所産で、円文内に塗膜状の赤彩が認められる。

56～61は後期初頭の土器である。56～60は磨消縄文によりJ字状文などを描出したもので、57はJ字文を留める。いずれも称名寺1式に比定される。61は隆帯を楕円状に巻き上げた突起部で、両側縁に刺突の列点文を施す。称名寺2式の所産である。

石器は石鏃未成品1点、楔形石器34点、打製石斧18点、横刃形石器2点、砥石1点、二次加工のある剥片(RF)6点、微細剥離痕のある剥片(UF)46点、石核18点、剥片197点、玉石1点の合計324点が採集される。石器組成のうち、楔形石器が34点と多く認められるのが特徴的である。また、流紋岩製の砥石が1点含まれるが、古代の所産と思われる。

(4) 堂地遺跡 ND6～8 地点 (第8図、表4・5)

堂地遺跡は牧野字堂地に所在する。中尾遺跡とは馬本沢―八幡沢を挟んで対岸に立地しており、その関係性が示唆される。佐藤氏の分布調査でND6～8地点の3か所で遺物の散布が確認されるが、ND6地点とND7・8地点とは段丘面も異なり、約500m離れているため、性質的には別遺跡と考えられる。ND7・8地点は馬本沢右岸の殿地原と呼ばれる緩斜面状の段丘面に立地し、町分布調査でも殿地遺跡として報告され、相模原市No.472遺跡として周知化されている。採集資料はND6地点が縄文土器

11点、石器260点の合計271点、ND7地点が縄文土器183点、石器102点の合計285点、ND8地点が縄文土器21点、石器2点の合計23点である。また、地点が混入していると思われるND6.7地点の石器が他に70点ある。

堂地遺跡 ND6 地点の縄文土器は4点を図示した。第8図1は半截竹管状工具による集合沈線で鋸歯状に描出する。2・3は結節浮線文を密に施す。1が諸磯c式古段階、2・3が諸磯c式新段階に比定される。4は口縁部を屈曲させ、刻目隆線を1条巡らせた堀之内2式である。

石器は石鏃8点、石鏃未成品3点、楔形石器76点、磨製石斧2点、打製石斧3点、削器1点、砥石1点、二次加工のある剥片(RF)9点、微細剥離痕のある剥片(UF)14点、石核12点、剥片130点、玉石1点の合計260点が採集される。石器組成のうち、楔形石器が76点と卓越し、利用石材も黒曜石、硬質細粒凝灰岩、チャートなど多様性がみられる。流紋岩製の砥石が1点含まれるが、古代の所産と思われる。

堂地遺跡 ND7 地点の縄文土器は後期を主体とする。5・6は後期初頭の土器で、5は斜行する磨消縄文で称名寺1式、6は平行沈線内に列点文を施す称名寺2式に比定される。7～14は後期前葉の土器である。7は簡素な沈線文様で所謂下北原類型とみられる。8は縄文地に十字の沈線で分けられる。9～12は3本単位の沈線文によるもので、堀之内1式に比定される。9は頸部～胴部と思われる、頸部に施された単位文を起点に、沈線が弧状に施される。12は渦巻状の沈線文で、鉢形土器の一部と思われる。13・14は磨消による帯縄文で、14は対弧文の一部とみられる。堀之内2式に比定される。15～17は後期中葉の土器で、15・16は沈線による内文をもつ加曾利B1式の所産である。17はくの字状に屈曲した口縁部で、屈曲部に細い帯縄文が巡り、胴部に横位沈線が巡る。加曾利B1～2式の所産と思われる。

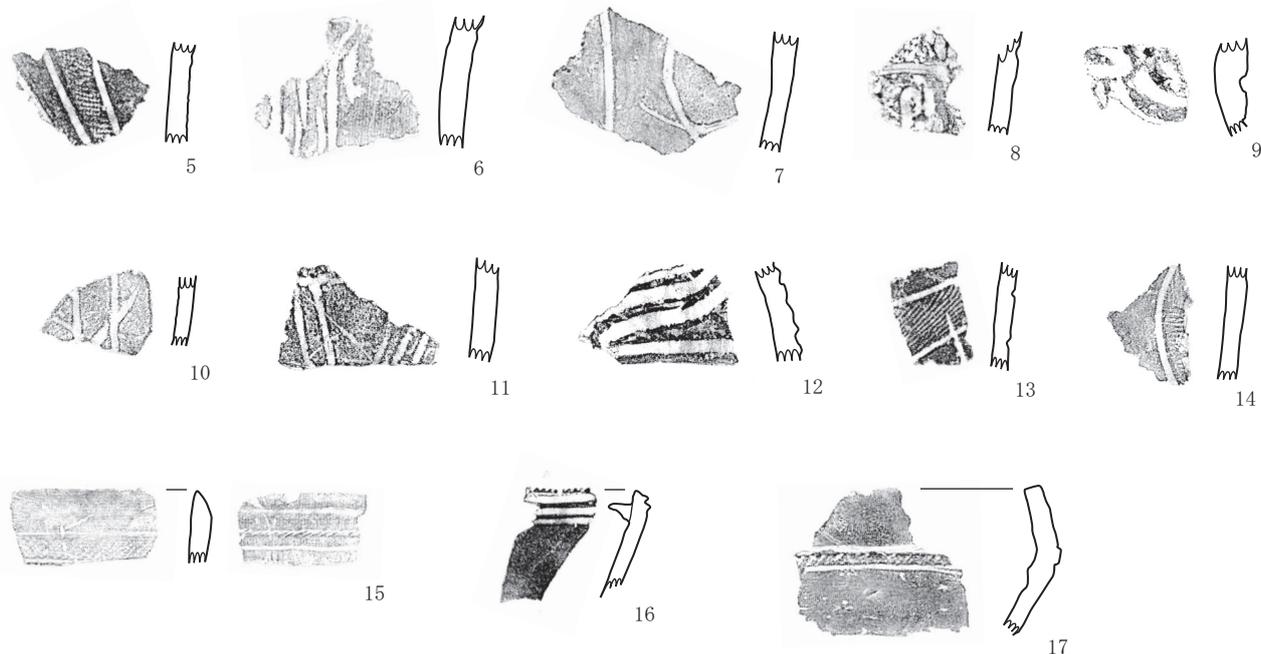
石器は石鏃6点、楔形石器15点、打製石斧2点、削器1点、二次加工のある剥片(RF)9点、微細剥離痕のある剥片(UF)29点、石核10点、剥片30点の合計102点が採集される。不定型なRF・UFや石器製作残差資料を除く決定器種では、楔形石器が15点とやや多く採集されている。

堂地遺跡 ND8 地点の縄文土器は3点を図示した。いずれも中期後葉の胴部片で、条線を地文とする。18は横位沈線の下位に条線が施され、連弧文土器もしくは曾利Ⅲ～Ⅳ式に比定される。19は胴部のくびれ部で、曾利Ⅲ～Ⅳ式とみられる。20は低隆線に沿って指ナデされた大柄渦巻文で、今福氏(2008)の隆帯施文技法の6類に該当し、曾利Ⅳ式に比定される。

【堂地遺跡 ND6 地点】



【堂地遺跡 ND7 地点】



【堂地遺跡 ND8 地点】



第8図 堂地遺跡 ND6～8地点採集の縄文土器(S=1/3)

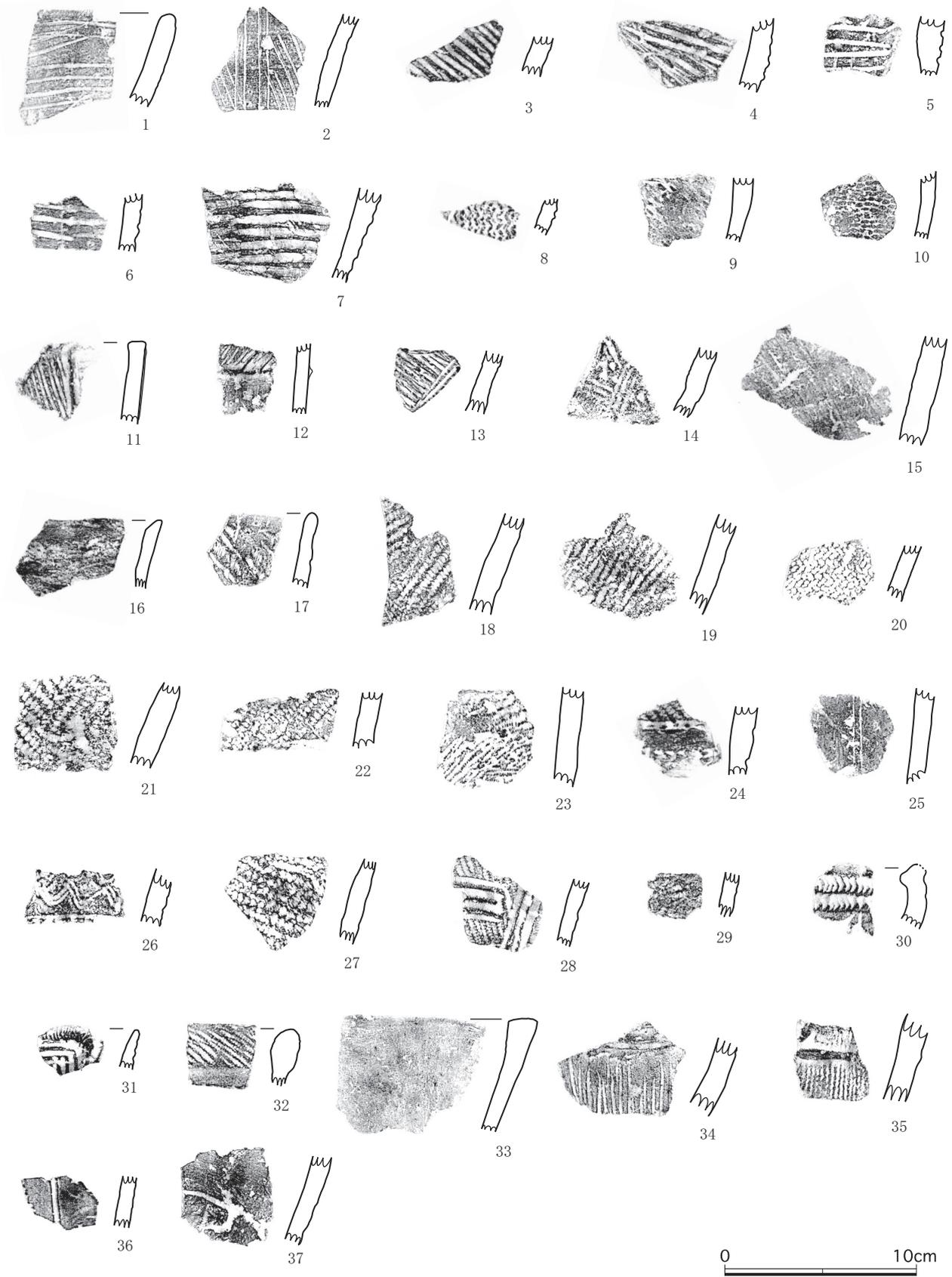
石器はホルンフェルス製の打製石斧1点と削器1点の計2点のみである。

(5) 大久和遺跡 (第9図、表6)

大久和遺跡は牧野字大久和に所在する。佐藤氏の分布図によれば、北流する川上川の西岸で、舌状に突き出た狭い段丘面付近にドットが落ちている。遺跡名は記されていないため、確たることは言えないが、本採集資料はその場所と推定される。大久和地区には他に町分布調査で確認され、相模原市 No.507 遺跡として周知化されている大久和戸丸遺跡が分布する (註8)。また、県の遺跡分

布地図・遺跡台帳には登載されていないが、平成5年の町史編さん事業に伴う分布調査で、新たに大久和東遺跡と大久和南遺跡が確認されており、大久和南遺跡からは早期の押型文土器と条痕文土器が採集されている (土井1994)。

縄文土器は早期中葉～前期を主体に後期前葉まで含まれる。第9図1～7は早期中葉の沈線文系土器で、2の胎土には雲母が多量に含まれる。1・2の沈線文は細く、1が横位→斜位、2が縦位→斜位に沈線が施される。3～7の沈線文は太く、斜位もしくは横位に施される。いずれも田戸下層式に比定される。



第9図 大久和遺跡採集の縄文土器(S=1/3)

表2 大畑遺跡採集の石器石材組成表

	黒曜石	硬細凝	中凝	ホルン	チャート	珪頁岩	頁岩	砂岩	石英	水晶	合計
石鏃	1				3						4
石鏃未成品	3										3
楔形石器	5					1					6
打製石斧				1			3	10			14
横刃形石器								2			2
石匙		1					1				2
R F		2			2		1				5
U F	12	1	1		4	1	1	1			21
石核					3				1		4
剥片	22	1	1	3	11	5	2	3	2	1	51
合計	43	5	2	4	23	7	8	16	3	1	112

表3 中尾遺跡 ND3 地点採集の石器石材組成表

	黒曜石	硬細凝	軟細凝	中凝	ホルン	チャート	珪頁岩	頁岩	粘板岩	石英	瑪瑙	合計
石鏃未成品	1											1
楔形石器	32						2					34
打製石斧		2		2	14							18
横刃形石器		1		1								2
砥石									1			1
R F	4				1	1						6
U F	35	4		2	4		1					46
石核	15	2	1									18
剥片	134	18	2	12	18	9	1	1		1	1	197
玉石		1										1
合計	221	28	3	17	37	12	2	1	1	1	1	324

表4 堂地遺跡 ND6 地点採集の石器石材組成表

	黒曜石	ガ黒安	硬細凝	軟細凝	中凝	ホルン	チャート	珪頁岩	頁岩	粘板岩	安山岩	流紋岩	石英	瑪瑙	蛇紋岩	水晶	合計
石鏃	5	1		1			1										8
石鏃未成品			2				1										3
楔形石器	18	8	22			1	20						2	5			76
磨製石斧									1						1		2
打製石斧			1			2											3
削器						1											1
砥石												1					1
R F			1	1		2	1	1		1				2			9
U F	3		4			2	5										14
石核	3							1					5	3			12
剥片	25	5	31		2	18	28	4			1		9	6		1	130
玉石							1										1
合計	54	14	61	2	2	26	57	6	1	1	1	1	16	16	1	1	260

表5 堂地遺跡 ND7 地点採集の石器石材組成表

	黒曜石	硬細凝	中凝	ホルン	チャート	頁岩	石英	合計
石鏃	4				2			6
楔形石器	9	3			3			15
打製石斧				2				2
削器		1						1
R F	2	3		1	3			9
U F	22	1	1	1	3	1		29
石核	2	2			2		4	10
剥片	22	2		1	5			30
合計	61	12	1	5	18	1	4	102

表6 大久和遺跡採集の石器石材組成表

	黒曜石	ガ黒安	硬細凝	軟細凝	中凝	ホルン	チャート	珪頁岩	瑪瑙	合計
石鏃	3	1	1				2	1		8
石鏃未成品	2		1				1			4
楔形石器	4							1		5
打製石斧						2				2
削器					1	1				2
横刃形石器						2				2
R F	3		1			1	5			10
U F	12		4			2	6	1	1	26
石核	2		3				2	4		11
剥片	53		13	1		2	6	2	3	80
合計	79	1	23	1	1	10	22	9	4	150

8～10は早期の押型文系土器で、10の胎土には雲母が多量に含まれる。8は山形押型文、9・10は楕円押型文で細久保式に比定される。

11～17は早期後葉の条痕文系土器である。11～13は微隆起線による区画で斜行する条線を施す。14は斜位に交差する条痕で、胎土に雲母が極めて多量に混入し、15には繊維を含む。17の口縁部片は引きずり手法による貝殻腹縁文が施されており、早期末の打越式に比定される。

18～24は前期前半の羽状縄文系土器である。いずれも胎土に繊維を含んだ繊維土器で、断面に黒色帯を形成しているのが特徴的に認められる。24には平行する爪形文が巡っており、黒浜式に比定される。

25～29は前期後半の竹管文系土器で、25は細い平行沈線が縦位に走る。26は繊維土器で、爪形文の上位に対向する蛇行沈線文が巡る。25は諸磯a式古段階、26は諸磯a式新段階に比定される。27～29は諸磯式のものと思われるが判然としない。

30～32は中期中葉の土器である。30の口縁部は2条並走する三角押文を施した勝坂1b式(新道段階)である。32は爪形文を伴う隆線区画に沈線が充填されたパネル文の一部とみられ、勝坂2式(藤内段階)に比定される。32は口縁に帯縄文を巡らせ、胎土には雲母が含まれており、勝坂3式に比定される。

33～35は中期後葉の土器である。33は曾利式の深鉢形土器の無文口縁部、34は条線を地文とした曾利Ⅲ～Ⅳ式の土器である。35は縦走する撚糸文に隆線文を留めており、加曾利E1式もしくは連弧文土器とみられる。

36・37は単沈線による描出の堀之内1式である

まとめ

表7にまとめたとおり、採集遺物からみた各遺跡の形成時期は多様であり、山間部である藤野地域の縄文時代の特質を示唆する。

大畑遺跡では中期中葉～中期末にかけて主体的で、沢井川流域に分布する中期集落址である大日野原遺跡や嵯峨遺跡と同時期に形成されていたものと推察される。大刀遺跡の採集地点は不明であるが、前期後半の諸磯式期に集中する。詳細は不明であるが、下小淵遺跡の卵塔地点では玦状耳飾を伴う前期の住居址が確認されているほか、三ヶ木に所在する津久井町 No.62 遺跡では諸磯b式期の竪穴住居址が調査されている。山間部における集落展開は諸磯式期の特徴とみられる。中尾遺跡は既報告と合わせて1,200点以上の土器が採集されており、中期を主体に多時期に亘る遺跡形成が特徴として挙げられる。採集遺物の中には早期後葉の東海条痕文系の上ノ山式土

器が含まれており注目される。堂地遺跡は緩斜面地のND7地点で、後期前葉～中葉を主体に遺物が採集されている。柵戸中原遺跡では後期中葉加曾利B2式期まで下る配石遺構が検出されているほか、道志川流域の青根馬渡No.2遺跡では堀之内1式期の住居址が4軒、同No.4遺跡では加曾利B1式期の住居址が1軒、青根中学校遺跡でも敷石住居址からなる集落が確認されており、堂地遺跡でも配石集落址として形成されていた可能性が示唆される。大久和遺跡は中期中葉～前期前半の土器が主体的にみられ、早期末の打越式土器も含まれていた。打越式土器は青根馬渡No.2遺跡で復元個体が5個体みられるなど、山間部における分布のあり方が注目される。また、青根馬渡遺跡群は大久和遺跡と遺跡形成時期が類似しており、遺跡群全体で集石土坑が120基程検出されている。条痕文期においては、青野原の明日庭遺跡で竪穴状遺構と貯蔵穴からなる集落構造が確認され、長谷原遺跡では80基近い炉穴が検出される。城山南麓の津久井城跡荒久地区でも、竪穴住居址や炉穴が検出されており、山間部に集中する早期の活発な人類活動を大久和遺跡でも反映していると思われる。

佐藤氏旧蔵の藤野地域における採集資料の資料報告は、本報告(第3報)をもって完了となる。佐藤氏の分布調査成果は、堂地遺跡や大久和遺跡など既知の遺跡としては知られていない地点も含まれており、今日的に資料を評価することの意義は大きい。また、そうすることで1970年頃に地道に分布調査を行われた佐藤氏に敬意を表するものである。

表7 採集遺跡の遺跡形成時期

	早期		前期		中期		後期				
	沈線文系	押型文系	条痕文系	羽状縄文系	竹管文系	五領ヶ台式	勝坂式	加曾利E・曾利式	称名寺式	堀之内式	加曾利B式
大畑遺跡			○	○	○		◎	◎		○	
大刀遺跡					◎						
中尾遺跡ND3地点			○	○	○		○	◎	○	○	
堂地遺跡ND6地点					○					○	
堂地遺跡ND7地点									○	◎	○
堂地遺跡ND8地点								○			
大久和遺跡	◎	○	◎	◎	○		○	○		○	

- 註1 詳細は2項でふれるが、地点コードの「ND」は字名の中尾(N)と堂地(D)の略号として本報告で新たに付したものである。
- 註2 平成23年度までは河本雅人、平成24～26年度は正洋樹、平成27年度は木村弘樹、平成28年度は中川が担当学芸員として整理作業を担当し、相模原縄文研究会のB班が実質的な整理作業を実施した。平成27年度までの同会による整理作業には、河本がその専門的指導にあたった。
- 註3 注記は採集地点別に「遺跡名・遺物番号」により、大畑遺跡が「大畑○」・「オオハタ○」、大刀遺跡が「大○」、中尾遺跡ND3地点が「D3○」、堂地遺跡ND6～8地点が「D6○」～「D8○」、大久和遺跡が「大久和○」とした。
- 註4 図のトレース及びレイアウトは萩原弘幸氏、佐藤ななみ氏の協力を得た。記して感謝する。
- 註5 県の遺跡分布地図は段丘崖斜面に範囲設定されており、遺跡位置の錯誤とみられる。
- 註6 本報告の諸磯式土器は、関根(2008)の編年を参考とした。
- 註7 県の遺跡分布地図は八幡沢の東斜面に範囲設定されており、遺跡位置の錯誤とみられる。また、八幡沢を挟んで立地が異なるND1～3地点とND4・5地点は本来別遺跡と捉えられるが、当館の既報告ではND2・4・5が一括して「中尾小尾谷戸遺跡」として報告されている(正ほか2015)。中尾小尾谷戸遺跡はND1～3地点を本来指す遺跡であるため、ここで改めて訂正をさせていただく。本稿では包括的な遺跡名として「中尾遺跡」と呼称する。
- 註8 県の遺跡分布地図は八幡沢上流の斜面に範囲設定されており、遺跡位置の錯誤とみられる。

(引用参考文献)

- 相田 薫 2016「奥牧野遺跡」『相模原市文化財年報 平成27年度の成果』相模原市教育委員会
- 赤星直忠・岡本 勇 1965「柵戸中原遺跡の調査」『中央高速道路埋蔵文化財調査概報』神奈川県文化財協会
- 赤星直忠・岡本 勇 1979「遺跡解説」『神奈川県史』資料編20(考古資料) 神奈川県
- 今福利恵 2005「曾利式土器大形甕の施文技法－甲府盆地釈迦堂遺跡出土事例を中心に－」『長沢宏昌氏退職記念考古論叢集』長沢宏昌氏退職記念考古論叢集刊行会
- 大貫英明 2001「相模湖町の考古学研究史」『相模湖町史』通史編 相模湖町
- 奥田直栄 1965「神奈川県下小淵遺跡発掘調査概報」『中央高速道路埋蔵文化財調査概報』神奈川県文化財協会
- 河本雅人 2008「資料報告 牧野地区で採集された考古資料について」『相模原市立博物館研究報告』第17集 相模原市立博物館
- 河本雅人・相模原縄文研究会 2009「資料報告 大日野原遺跡の縄文時代資料について」『相模原市立博物館研究報告』第18集 相模原市立博物館
- 河本雅人ほか 2015『津久井城跡荒久地区発掘調査報告書』相模原市
- 河野喜映 1994『青根上野田遺跡』かながわ考古学財団調査報告2
- 河野喜映ほか 1995『青野原バイパス関連遺跡』かながわ考古学財団調査報告5
- 呉地英夫ほか 1991『青根中学校地内遺跡発掘調査報告書』青根中学校地内遺跡発掘調査団
- 小林謙一ほか 2013『大日野原遺跡－第3次発掘調査－遺構編』中央大学文学部考古学研究室調査報告書2
- 小林謙一ほか 2014『大日野原遺跡－第3次発掘調査－遺物編』中央大学文学部考古学研究室調査報告3
- 関根慎二 2008「諸磯式土器」『総覧 縄文土器』
- 滝澤亮ほか 1987『藤野町嵯峨遺跡』藤野町教育委員会
- 滝澤亮ほか 1997「篠原大割目遺跡の調査」『会報 文化財』第11号 藤野町教育委員会
- 滝澤亮ほか 1998「大日野原(ケッサイコ)遺跡の調査」『会報 文化財』第10号 藤野町教育委員会
- 土井義夫 1994「藤野町採集の遺物」『藤野町史』資料編(上) 藤野町
- 戸田哲也 1998「神奈川県における曾利Ⅳ式期の土器様相」『考古論争神奈河』第7集 神奈川県考古学会
- 中村哲也 1998『津久井町 No.62 遺跡発掘調査報告書』津久井町 No.62 遺跡発掘調査団
- 中村日出男 1979「神奈川県大日野原遺跡出土の人体装飾付土器及び顔面把手付土器」『考古学ジャーナル』No.166 ニューサイエンス社
- 平野裕久ほか 1999『道志導水路関連遺跡』かながわ考古学財団調査報告59
- 藤野町文化財保護委員会編 1978『ふじ乃町の埋蔵文化財』藤野町教育委員会
- 正 洋樹・相模原縄文研究会A班 2015「資料報告 中尾小尾谷戸遺跡の採集土器について」『相模原市立博物館研究報告』第23集 相模原市立博物館
- 米沢容一 1986「青根中学校遺跡」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』28 神奈川県教育委員会